



こころ豊かな毎日のために

●
松尾恵子 Keiko MATSUO

花王株式会社 社長室外部連携グループ 部長



誰もが使ったことのある石けんであるが、人類初の石けんができたのは紀元前3000年頃と言われている。羊を火であぶっているとき、したたり落ちた脂肪が木の灰に混ざって石けんのようなものができた。その石けんがしみ込んだ土は、汚れを落とす貴重な土として珍重されたそうだ。その後、8世紀頃から地中海沿岸で石けん製造業が始まり、石けんの原料となる油脂（オリーブ油）とアルカリ（海藻を焼いた灰）が豊富にあったフランスのマルセイユやイタリアのサボナが石けん工業の中心地になった。19世紀には、フランスの科学者シュブールが脂肪酸とソーダ（カリ）が結びついて石けんになることを発見し、この発見で、手に入りやすい原料で、大量に安く石けんが製造されるようになり、貴族のぜいたく品から庶民でも手が届くようになったと言われている。

日本で固形石けんが庶民にも広く普及したのは、昭和に入ってからのこと。かつては、石けん1つで、頭からつま先まで洗う人も少なくなかった。しかし、今では身体の部位ごとに専用の商品を使う人が増え、洗顔フォームやボディソープの使用率は、石けんの使用率を上回る。そのきっかけを作ったのが、1890年に顔も洗える高品質の国産石けんを発売した“花王石鹼”である。石けん屋が石けんを否定する、そのきっかけは、お客様のお声だった。1970年代当時は、石けんによる洗顔が主流だったが、汚れ落ちや使用後のつっぱり感といった点で、必ずしも満足されるものではなかった。そこで、石けんに代わる新たな技術を求めて研究を行い、ついに石けんに代わる洗顔フォームを開発した。肌にマイルドだから1日に何度も洗顔できる。こまめに洗顔できるからニキビ予防にも優れている。このようなベネフィットの提案により、若い女性の心をとらえて、新しいカテゴリーの創造につながったのである。

私がこのような洗顔料開発の歴史を知ったのは、花王に入社してからである。自分が毎日の生活の中で使っている商品には、こんなエピソードがあったのだと興味深かった。時代のニーズに合った商品の提案は、その時代の生活者をよく見て、よく声を聞いて生まれたものであった。その後、私は洗顔料の商品開発研究を担当することになり、「汚れ落ち」と「肌へのやさしさ」という2つの相反する機能を両立する皮膚洗浄技術開発研究に携わり、商品として発売する機会を得た。洗顔料1つの中にも、たくさんの化学が詰め込まれていることを実学として学ぶことができた。さらに、洗顔料には汚れを落とすという機能的価値に加えて、こころに働きかける情緒的側面もあることも学んだ。朝、顔を洗うと気持ちよく一日が始まり、夜、疲れて帰ってきて顔も洗うとすっきりして気分も軽くなる、というお声をいただいたことがある。肌がきれいだと自信につながる、と答える方も多い。モノづくりを通して、毎日の生活に貢献できるということは大きな喜びである。

© 2019 The Chemical Society of Japan